

第64回総会期第2回委員会報告

被災支援委員 小池 正造

7月12日教団問題協議会終了後に、上尾合同教会を会場に被災支援委員会が行われました。

最初に、秋山委員長より教団対策本部会議の報告として、①エマオ(仙台、石巻)、遠野の人事について、②関東教区から推薦をしたスマイルキャンプの承認がなされたこと、水戸中央教会の建築工事の進捗状況について訪問をすることが報告された。小林委員より、安行教会が食事ボランティアに9月に行く予定になっていることが報告された。宇都宮上町教会の工事の進捗状況が報告されました。8月中に建築確認申請がおりる見込みで、その後に教団へ支援申請を提出することになります。

教団教育委員会から、クリスマス献金(100万円)が送られてきました。分配について協議をして、昨年と同様に、被災乳幼児施設に均等に分配することになりました。

水戸中央教会の工事の経過について、水戸中央教会より提出していただいた資料を基に確認をいたしました。度々の計画の変更があり、未だ着工できていない状況であることが分かりました。

次回委員会は、9月9日(火)常置委員会終了後大宮教会で開催します。

被災地と共に歩むボランティアを募集します！

震災から3回目の夏がやって来ました。日常の生活が戻ってきたように感じていますが、まだまだ震災の爪痕は残っています。私たちの小さな手が、復興への足がかりとなればと願っています。私たちの小さな手にも、できることはいくつでもあります。特に、関東教区では、食事調理のボランティア派遣に力を入れています。どうぞ、皆さんの手をおかしてください。

○食事調理：スタッフやワーカーの方々への夕食を準備します。夏場は滞在者が多くなります。できるだけ、3名1グループでの応募をお願いします。

：募集は随時しています(日曜を除く)

○通常のワーク：田畑作業・漁労のお手伝い(石巻)・被災家屋の清掃や整理、地域の行事などへの参加

募集はエマオ繁忙期の夏を避けて9月16日から再び募集します(日曜を除く)

お申し込みは被災支援委員・小林(090-3529-5140)まで

日本基督教団東日本大震災救援募金

*現在の募金状況(2014.7.18現在)

¥881,700,876

「東日本大震災救援募金」

¥371,219,644

「東日本大震災海外献金プロジェクト」

「ボランティアお断り」とは何だったのか(前編)

新井 純(支援委員・十日町教会牧師)

去る7月9日～11日、北海教区主催の「震災と教会」協議会に参加いたしました。北海道南西沖地震から21年、阪神淡路大震災から19年、新潟県中越地震から10年、そして東日本大震災から3年が経過した今、繰り返される自然災害、特に震災を中心とした災害の中で、教会はそれらに対しどのように向き合い、そこから何を学び、何を伝えたのか、あるいは何ができなくて、何が足りなかったのか、そうしたことをそれぞれの経験から振り返り、互いに共有してみようという興味深い協議会でした。

初日は函館千歳教会を会場に、山本光一師(京葉中部教会)による主題講演「ボランティアお断り」から始まりました。山本師は北海道南西沖地震発生当時、北海教区宣教部社会問題委員会委員長の任にあり、津波によって大きな被害を受けた奥尻島で展開された北海教区による支援活動の中心的役割を担われた方です。

山本師が奥尻島に渡ったのは、島民たちの間で「ボランティアお断り」という決議がなされた直後だったと言います。なぜそのような決議がなされたのかと言えば、震災後いち早く島に渡ってきたキリスト教を名乗るボランティアたちが、「震災は神さまによる審判の結果なのだから、皆さん悔い改めて福音を信じなさい」と、いわゆる“伝道活動”を行ったためでした。震災と津波によって平穩無事な生活のみならず、家族や親しい友人知人の命までもが一瞬にして奪われ、途方に暮れながらも残された命を精一杯生きようともがき苦しんでいる被災者に、その試練がさも自業自得の天罰であるかのような物言いは、被災者により大きな苦しみを増し加えるだけでなく、己が正義という勘違いによる被災者への侮辱、神さまへの冒瀆以外の何ものでもありません。実は、このようなことはその後の震災でも繰り返され、助けてくれるはずのボランティアが二次災害になるという典型的な例となっています。

そのため、北海教区はキリスト教会であることを伏せながら活動を展開しました。教会の組織として活動することが大事なのではなく、キリスト者として「被災者に寄り添うこと」が大切だという判断です。結果、次々に送り込まれるボランティアは島民の間で受け入れられ、行政との連携も密なものとなり、長期の支援活動が継続されました。そして、あえて言うまでもないのですが、島民たちはそのボランティアがキリスト教会から派遣されてきた人たちであることを知っていたのです。活動すれば顔見知りになり、顔見知りになれば世間話もする、そうなればボランティアにきた背景を含め様々なことを話すようになり、当然キリスト者であることや、教会から派遣されてきたことも明らかになります。それでも「ボランティアお断り」とならなかったのは、その誠実さによって心が通じ合い、信頼関係が結べたからに他なりません。これみよがしに旗を振り回さなくても、隣人を思う心が真実で健全ならば、その背後におられるキリストの姿は、当人を通してしっかり表されるのだということを確認できたエピソードでした。

その後、兵庫教区被災者生活支援長田センター運営委員長、佃真人師(宝塚教会)が阪神淡路大震災当時の様子をお話してくださいました。詳細は割愛しますが、被災地で起こった種々のトラブルや、当時の被災教会の様子、混乱と復旧、その後の長田センター設立と活動に至る経緯などを詳細にご報告いただきました。被災経験がある方ならここここで大きく頷きたくなるようなお話、ひと言で表現するなら「震災あるある」とでも申しませうか、自分の経験に照らし合わせながら、まさに「そうそう、そうだったそうだった」と頷き続ける発題でした。質疑も活発に行われ、予定の時刻を大幅に過ぎるほど熱心に意見交換がなされました。(後編次号につづく)